

バングラデシュにおける母語・国語・英語 ーベンガル語運動の「栄光」と

グローバル化の中での矛盾ー

高田 峰夫 (広島修道大学人文学部)

はじめに

2月21日は「国際母語デー」(International Mother Language Day)である。言語と文化の多様性、多言語の使用、それぞれの母語の尊重等を推進する目的で、国連教育科学文化機関(ユネスコ)が1999年11月17日に制定した。しかし、世界的に見て、いったいどれだけの人がこの記念日のことを知っているだろうか。恐らく、ごくわずかでしかあるまい。これに対し、バングラデシュでは、この記念日が良く知られている。それは、この記念日がバングラデシュの国語、ベンガル語の歴史的記念日「エクシェ」にちなんで制定されたことによる。このような形で世界的に認知されるほど、バングラデシュにおいてベンガル語は重要なのである。ところが、そのバングラデシュで実は今、英語で教育をする学校の人気が非常に高い。本稿では、この矛盾する状況を生み出したプロセスの理解を手がかりに、同国における母語、国語、英語の複雑な相関関係に接近してみたい¹。

1. 言語運動から国際母語デーへ

1.1. 言語運動と「エクシェ」

「言語運動」は正式には「ベンガル語国語化運動」だが、バングラデシュでは「言語運動」だけで通用する。言語運動はかなり長期に渡る運動だが、ここでは諸研究を要約する形で概要をまとめてみよう²。ただし、言語運動は(旧)パキスタン時代に起きた運動であり、なおかつ、運動が起きた背景には(旧)パキスタン成立当初の特殊な要因が大きく影響している。そのため、話は(旧)パキスタンの誕生にまで遡らねばならない³。

注

- 1 本稿は、中華民国(台湾)台中市の東海大学日本語文学系主催による国際学術シンポジウム『ことば・ひと・越境』(2008年3月8日～9日に同大学で開催)の発表原稿[高田2008]を基に改定したものである。同シンポジウムで発表の機会を与えて下さった東海大学日本語文学系の諸先生方に感謝すると共に、とりわけ事前調整に尽力していただいた松尾慎氏のご努力を明記して謝意を表したい。
- 2 詳細な研究としてUMAR[1992]、比較的コンパクトなまとめとしてHELAL[2003b]を参照。日本語で読める研究としては白井[1990]がある。
- 3 パキスタン誕生と内部の分裂傾向、バングラデシュ独立との関係等についてはSAMAD[1995]を参照。

英領植民地インドは1947年、インドと（旧）パキスタンとに分離独立した。このプロセスは非常に複雑で現在でもなお不明な点が多いが、そこにヒンドゥー教徒を中心とするインド側とムスリム（イスラーム教徒）中心の（旧）パキスタンとの宗教的差異と、その差異に基づく両宗教コミュニティの利害や思惑・駆け引きとが大きく関わっていたことは間違いない。ともあれ、印パは分離独立した。しかし（旧）パキスタンは、西パキスタンと東パキスタンという、インドを挟んで遠く離れた二つの地域が一つの国家を形成する、極めて変則的な国家形態であった。しかも、西パキスタン（以下「西」）は内部が地理的には大きく4地域（パンジャーブ、シンド、バローチスタン、北西辺境州）、言語民族集団的には5グループ（＝上記の4地域にほぼ相当するパンジャーブ、シンディ、バローチ、パシュトゥーン、それにムハージル＝インドから流入したウルドゥー語を母語とする人々）から成り、国民の多くはムスリムである点でのみ共通するものの、それ以外の点では非常に不安定な状況だった。（旧）パキスタンを主導したジンナー等指導者たちは、この不安定な状況を安定させ、国民を統合するために、単一の言語を選び、それを国語とすることを重要な手段と考えた。そこで選ばれたのが、人口の上ではわずか7%ほどを占めるだけだが、「西」の他の言語集団の間ではリング・フランカ的役割を担うウルドゥー語だった。ウルドゥー語は既存の4地域集団のどの言語でもない点で中立であり、地域・民族集団間のバランスを取るのに都合が良かっただけでなく、他の言語集団と同じ文字（アラビア文字）であることも考慮されたようだ。

他方、東パキスタン（以下「東」）で圧倒的な多数を占めるベンガル人の言語はベンガル語であり、「西」の諸言語とは大きく異なる上に、独自のベンガル文字を有している。それゆえ、印パ分離以前から「東」ではベンガル語をパキスタンの国語（少なくともその一つ）とする要求があり、分離後はこの問題が焦点化していた。そこに中央政府のウルドゥー語国語化の推進表明である。当然、この政策は「東」で強い反発をよび、早くも1947年末（分離からわずか数ヵ月後）には反政府感情が表明されるようになる。翌1948年3月には国語行動委員会が首相に対して8項目要求を出し、その第3項目では「ベンガル語にウルドゥー語と対等の位置」を求めるとうたわれていた。しかし、直後にダッカを訪れた建国の父ジンナーは「1国家1言語」の原則に立って国語はウルドゥー語だけであることを強調し、「東」の人々に衝撃を与えた。

「東」の動きに対して「西」では、それは「分離主義」である、との批判が強まり、1948年から1950年にかけて、逆にウルドゥー語国語化、ベンガル語のアラビア文字による表記義務化が主張され、広く支持されるようになる。さらには、言語の簡素化を名目にベンガル語の改変まで画策された。この間、中央政府の失政、農業政策失敗による食糧事情の悪化（特にそれに対する農民の反発）、労働者たちの低賃金に対する不満、教員たちの待遇不満、情報統制に対する知識人の不満、学生たちの反政府意識等々、各方面で様々な不満や政府に対する批判意識が高まっていったようだ[SOBHAN 1992]。

こうした推移の中で1952年1月末に首相のナジムッディン（Najimuddin）が、1948年3月にジンナーが行った演説を引用しつつ、「東の人間は州（＝東パキスタン）の言語を決めてもよい。ただし、国語はウルドゥー語以外にありえない」と発言した。これに「東」の学生が大反発し、知識人や政治家も同調する。彼らは、2月20日の東ベンガル議会開催予定に合わせ、2月21日にベンガル語国語化を要求してゼネストを呼びかけた。2月20日には全政党統一集会開催されたが、動きを抑え込むた

め政府は集会や行進の30日間禁止令を発表。この禁令に学生たちが一層反発し、一気に事態が緊迫化した。2月21日、学生たちは朝からピケを張り、その後、禁令を破って警官隊と衝突。警官隊の発砲により3名が死亡し、約60名が負傷した。さらに翌日には、死者の追悼礼拝のため数千人が集まり、その後デモ行進を行った。それに対して警官隊が再び発砲し、6名死亡、50名以上が負傷するという悲劇的な事件に発展した。これ以後、「2月21日」は「エクシェ・フェブラリー」（ベンガル語で「2月21日」の意）または簡略に「エクシェ」（*Ekushey*, 21日）として、さらには別名「殉難者の日」（*Shaheed dibas*）として、「東」では特別な意味を持つようになった。

1.2. バングラデシュ独立から国際母語デーになるまで

「エクシェ」を受け、翌1953年には諸政党を糾合して統一戦線が形成され、「21項目要求」が中央政府に対して出された。そのうちの3つの項目は「エクシェ」関連であったことから、「エクシェ」が持っていた政治的重要性が理解できよう。さらに続く1954年の選挙では、東パキスタンの地域自治権要求と、ベンガル語の国語化要求が焦点になった。これらに、当時の「東」の重要産品であったジュートの低価格問題、生活必需品である塩の高値問題等が重なり、選挙では統一戦線が地すべり的大勝を果たす。その後に開催された議会で、ベンガル語はウルドゥー語と並ぶ「国語」と認定された[AHMED, K. 1992]。

バングラデシュで一般的に語られる話では、この後の流れは次のようになる。言語運動で高まった人々の反中央／反「西」意識やベンガル人意識は、その後、明確にベンガリ・ナショナリズムの形をとるようになり、これを抑え込もうとする中央政府の動きと対立を深めてゆく。最終的には自治権要求を超えてベンガル人が主人公の「バングラデシュ」（ベンガル [人] の国）を求める動きとなり、「西」との戦争に突入。インドの助けを受けてこの戦いに勝利し、1971年にバングラデシュは独立する。独立達成後、人々は、ベンガリ・ナショナリズムの出発点となった「エクシェ」と、自分たちの「母語」（*matri bhasa=mother tongue*）ベンガル語のため身を捧げた犠牲者たち（＝エクシェの「殉難者」）とを顕彰し、さらには彼らを独立戦争の中で亡くなった人々（＝殉難者）と重ね合わせ、強く心に留めようとした。同国政府は、こうした人々の思いを国際社会に訴え、ユネスコが「世界母語デー」を制定するに当たり、「母語」のために殉難者たちがその身を犠牲にした2月21日こそがふさわしい、と強力にアピールする。努力が実り、1999年にパリで開催されたユネスコ総会の席上、2月21日が世界母語デーと決まった。これはまさに国際社会がバングラデシュの人々の「母語」に対する強い思いを認め、高い評価をしたことに他ならない、というのである。だからこそ、他の地域や国々ではさほど知られていない世界母語デーが、バングラデシュでは広く知られ、祝われるのである。

「母語」のために立ち上がり、自らの身を犠牲にした人々。彼らに触発され、ベンガル人意識を高揚させ、ついには戦争を勝ち抜き独立まで達成した人々。確かにこの物語は美しい。また、それゆえにこそ、世界的に訴求力を持ったのだろう。しかし、この物語は、あくまで「物語」でしかない。我々は物語の「背景」と「作り手」に目を向けてみることにしよう。

2. 母語と国語の間

2.1.母語：バングラデシュの言語状況

バングラデシュは「ベンガル人」が人口の99%を占める。ベンガル人は形質的に多様な人々であるが、他の南アジア地域からは「ベンガル文化」として区別される独自の文化伝統を持っており、その重要な核となるのがベンガル語とベンガル文学である。確かに、これら大多数の人にとってベンガル語は母語である。しかし逆に言えば、残る1%の人々（と言っても、100万人以上）にとって、ベンガル語は母語ではありえない。彼ら非ベンガル人の多くにとって、ベンガル語は全く言語系統を異にする言語であり、わざわざ学習しなくては理解不能な他言語なのである⁴。それゆえ、バングラデシュの多くの人によって記憶され、重要視される「1952年」ないし「エクシェ」は、それらの人々の集合的記憶カレンダーでは全く意味を持たない、との指摘がある[van SCHENDEL 2000]。

同時に、「ベンガル語」と一括りと言うが、内実はそれほど単純ではない。ベンガル語の形成史に関する言語学的研究によれば、一応サンスクリット系統ではあるものの、歴史的に言ってベンガル語は複数言語が基盤になっていたらしいこと、しかも、かなり後になるまで一部地域には全く別系統の言語の影響が色濃かったこと、その結果、現在のベンガル語は、狭い地理的領域にも関わらず、地理的に画然と区分された方言区画に分かれること等が知られている⁵。しかも、北東部のシレット(Sylhet)方言、東部のノアカリ(Noakhali)方言などは、バングラデシュ中部の人々にもかなり理解が困難なほど異なり、南東部チッタゴン(Chittagong)方言に至っては他地域の人には理解不能とされるほど語彙的、音声的、さらには統語面でも異なることも指摘されている⁶。また、ムガル朝のダッカではヒンドゥスタニ語(ヒンディー語、ウルドゥー語、ペルシャ語、アラビア語等の混成言語)が使用されていたし、その流れを引き、バングラデシュの首都ダッカの中心部オールド・ダッカの住人たち(「ダッカっ子(Dhakaiya)」と呼ばれる)は、つい最近までベンガル語の方言ではない特別の言語を使用してきたようだ[KHATUN 2003]。

さらに、ベンガル語は「ベンガル」地域の言語であるが、ベンガル地域は、大きく分けると西ベンガル(=ほぼインドの西ベンガル州に相当)と東ベンガル(=バングラデシュの主要部分に相当)の東西2地域に区分される。つまり、ベンガル語はバングラデシュ独自の言語ではないのである。その上、西ベンガルのベンガル語は英領期に、よりヒンドゥー化された「標準」ベンガル語であり、バングラデシュのベンガル語は印パ分離後に再度ムスリム化されたベンガル語とされる[BHATTACHARYYA 1987]⁷。

つまり、「言語運動」から「エクシェ」で象徴される「ベンガル語」とは、あくまでも「バングラデシュ(当時は東パキスタン)で使用されている」と条件付のベンガル語でしかなかった。それがあたかもバングラデシュ独自の言語であるかのように「物語」られ、さらにはバングラデシュの

注

- 4 言語状況を含め、これらの人々が直面する様々な問題については、高田[2008b]を参照。
- 5 ベンガル語の言語的特性、形成史、地理的特性や使用状況等についてはHUQ and SARKAR [2003]参照。
- 6 チッタゴン地方は歴史的にアラブ商人やペルシャ系アラビア語話者の進出が顕著であったため、チッタゴン方言はアラビア語の強い影響を受けている、とされる。
- 7 東西ベンガル語の違い、現在のバングラデシュにおける「国語」と「ベンガリ・ナショナリズム」の関係、ムスリムとヒンドゥーの間でのベンガル語をめぐる微妙な駆け引き等については、高田[2006]、特にその第10章を参照。

人々全ての「母語」であるかの如く世界中にアピールされるのは、そこに物語の「作り手」の意識が濃厚に反映されているからに他ならない。

2.2.国語：「創られた伝統」と「二重の排除」

前節の議論で明らかなように、バングラデシュのベンガル語は「母語」ではなく「国語」なのである。それをあえて「母語」と主張するのは、「国家」を擬似的な「母」とし、その「母」なる「国」の独立に向けて捨石となった人々を称揚する、強烈なナショナリズム意識が働き、「母」なる「国」の「言語」を、「国語」ではなく比喩的に「母語」とすりかえる作為が働いている。この作為的すり替えが成立する背景には、数々の技巧が用いられたことを見逃すわけには行かない。

そもそも、「言語運動」は「母語」維持を目指した運動ではなかった。ウルドゥー語を唯一の国語とする中央政府の動きに対し、東パキスタンの人々が反発してベンガル語も「国語」（の少なくとも一つ）にするべきだ、と主張した運動であった。それゆえ、1947年にベンガル語運動を始め、後の言語運動の中心となった団体は、英語では”*Language Action Committee*”と曖昧に表現されているが、元々のベンガル語では”*Rastrabhasa Sangram Parishad*”（国語運動委員会）と明記されている[HELAL 2003b]。また、言語運動は時間的には次のように定義される。「言語運動は1948年に始まり、1952年2月21日の殺害でその頂点に達し、ベンガル語がパキスタンの国語の一つとして採用されたこと（＝1956年憲法採択時）で終わった」[HELAL 2003b]。ここでは、バングラデシュの独立に向けての動きが急加速する1960年代後半よりもはるか以前に、この運動が完了しているとされている。その終了時点とはベンガル語が（旧）パキスタンの「国語」に正式採択された時である⁸。

つまり、言語運動は、その本質をより明確化して言えば「国語」運動なのである。また、「国語」運動としては、当初の目的を立派に達成し、一度は終結したのであった。にもかかわらずその運動が、ベンガリ・ナショナリズムやバングラデシュ独立と密接に関係付けて語られ、「言語」運動として曖昧にされ、ついには「母語」を求めた運動であったかのように語られるに至ったのは、そこに仕掛けが働いたからであり、その語りが「創られた物語」であるからに他ならない。

まず、2日連続の「事件」の翌日、早くも1952年2月23日には、「エクシェ」の犠牲者を顕彰し、「殉難者」として記憶にとどめるため、現場に「殉難者碑」(*Shaheed Minar*)が学生たちの手で立てられた。また、事件後、毎年2月21日には「殉難者碑」の前で記念追悼行事が執り行われるようになった。ただし、独立以前のこの行事は、一部の有志が行う比較的小規模なものであったようだ。しかし独立後、この日は国の祝日とされ、行事も公式行事化されて大規模になり、大統領や首相を始め各国大使等まで参列する一大行事となった[AHMED, R. 2003]。また、この日にはテレビやラジオでも特別番組が放送され、新聞や雑誌でも特集記事が組まれる。こうして官民双方の手で「エクシェ」が意図的にナショナル・シンボル化されたのである⁹。まさに「創られた伝統」[HOBSBAWM

注

8 また、1955年末には言語運動の成果として、ベンガル語の発展・近代化のための言語センターが「バンガラ・アカデミー」として創設されたが、同アカデミーの組織の機能と構造はアカデミー・フランセーズ (*L'Académie française*: フランス語の純粋性を維持するために創設された組織) をモデルとしたとされる[HELAL 2003a]。アカデミー・フランセーズが近代国民国家フランスと密接不可分の組織であることは周知の通りであり、その組織をモデルとしたバンガラ・アカデミーが振興しようとしたベンガル語が当時の東パキスタン、現バングラデシュの「国語」であることは言うまでもない。

9 ナショナル・シンボルとしてのエクシェについては、「エクシェの歌」(*Ekusher Gan*) が生み出されたこと、「殉難者碑」の建設、それらの普及が重要であったことが指摘されている[GHOSH 1995]。

and RANGER eds. 1983]そのものである。

他方、「エクシェ」の犠牲者たちが、そのために命を捧げたとされる「母語」の「ベンガル語」は、徐々に西ベンガルのベンガル語に対し差異化が図られるようになる。例えば、1976年の初代大統領の暗殺後、後継のコンドカール・アブドゥル・ハミド (Khondkar Abdul Hamid) は、すぐさま “Bengali” (ベンガル人) の語を “Bangladeshi” (バングラデシュ人) に変更し、言語も “Bangladesh Language” (バングラデシュ語) にしようと試みた [ANISUZZAMAN 2000]。言語に関する言い換えは最終的に断念されたものの、ベンガル人を代替する「バングラデシュ人」の表現は、部分的にはあれ、徐々に定着してゆく¹⁰。また、ベンガル語の振興と発展を目的とするための公的組織としてバングラデシュには「バングラ・アカデミー」があり、同アカデミーではベンガル語「正書法」制定事業も行っている [HELAL 2003a]。しかし、ここで言うベンガル語は西ベンガルのそれとは暗に区別された「バングラデシュの国語」としてのベンガル語である¹¹。

これらの結果、バングラデシュの百科事典に掲載された国際母語デーの説明には、独特の記述が登場することになった。すなわち、2月21日が国際母語デーに選ばれたことは、国際社会による「まさしく、自分たちの母語のため1952年2月21日にバングラデシュのベンガル語話者たちがなした未曾有な犠牲の評価と承認である」というのである [ISLAM 2003]。しかし、「バングラデシュのベンガル語話者たち」と限定することで、この著者は「二重の排除」を行っている。すなわち、一方で「バングラデシュの」とすることにより、インドの西ベンガル州に多数いる「ヒンドゥー教徒」を中心とするベンガル語話者を排除しつつ、他方で「バングラデシュのベンガル語話者」とすることで、バングラデシュ国内にいる「非ベンガル語話者」を排除する。この同じ著者は先の記述の直前で、「国際母語デー」の設立目的を「言語の多様性と多言語教育を力づけるばかりでなく、(中略)理解、寛容、対話に基づく国際的連帯を触発する助けともなる」と説く。しかし、同じ著者が他方では「多様性と多言語教育」を排し、その結果「理解、寛容、対話に基づく国際的連帯を触発する」ことを阻害するとも受け止められる説明を行う事実。これが皮肉でなくて何であろうか¹²。

こうして、バングラデシュでは「母語＝国語＝ベンガル語」の図式が作り上げられてきた。その結果、同国の言語状況についての説明では「ベンガル語は国 (=バングラデシュ) の国語であり、一部の孤立した部族地域を除けば、広く使用されている。国内の大部分の公用はベンガル語でなされる」 [HUQ and SARKAR 2003] というまでになった。今では初等教育から「国語」としてのベンガル語教育が徹底され、それは国内の全ての地域に及ぶ¹³。

注

- 10 この背景には、かつて試みられたような「統一ベンガル」の動きが一切なかったこと、つまり、ヒンドゥー主導の西ベンガルに対するムスリム主導のバングラデシュ意識が強く、両者の間に良好な関係が存在しなかったことが指摘されている [RASHID 1992]。
- 11 その証拠に、同アカデミーが独自に編集・刊行する「ベンガル語－英語」辞書の収載語彙は、西ベンガルで刊行されている同種の辞書のものとはかなり異なる。
- 12 この「二重の排除」の記述が意識的に行われたのであれば、それはかなり悪質であるが、以上に述べた「物語」創作の経緯を考えれば理解できないこともない。しかし、仮にそれが無意識のうちになされたのであれば、問題の根は一層深いことになる。
- 13 あまりにそれが徹底したため、一部の少数民族では母語喪失の危機が真剣に論じられるほどの状況になっている。一例として、The Daily Star紙2008年2月21日のPinaki Royのレポート、“Losing mother tongue: Ethnic children forgetting their own languages” を参照。そこでは、国語ベンガル語での教育の徹底、それによる少数民族集団の子どもたちへのベンガル語の浸透が報告されている。その結果、ある研究ではバングラデシュの少数民族系の64言語中、すでに4言語が消滅したとされ、別の研究では51言語中4言語が消滅の危機にあるとしている、と報ずる。この報道が「エクシェ」当日であることにも注意したい。

3. 英語全盛

3.1. 植民地体験と英語

かくしてベンガル語は「国語」としての地位を確立した。少なくとも建前上は、あらゆる場面でベンガル語が浸透しているはずである。しかし、実のところ、これはあくまで「建前」でしかない。ある著者は、怒りの言葉を記す。「母語を公式な言語にすることを目指して崇高な犠牲を払った栄光の過去にもかかわらず、バングラデシュは、今日でもベンガル語を社会生活のすべての局面において導入できていない。この国の上級の裁判所は、今日でも法廷用語として英語を使用している。そのことによってこの国の多数の市民は、判決にいたるまでの手順を理解することが出来ないでいる。これに加えて、高等教育、特に理工系では、今日でも英語が使われている。ベンガル語の教科書がないこと、そしてこの国の政治的指導者にそれを作成する意思が欠けていることが、非難されるべきである。」[ハック2003]¹⁴。法廷や高等教育では英語が専ら用いられ、ベンガル語の影は薄いことが明白である。しかも、実態はさらに厳しい。それについては後に見るとして、まずは、このような英語浸透の歴史的背景に目を向けよう。

バングラデシュのみならず、広く南アジア地域への英語浸透を考える場合、イギリスの植民地であった歴史的経験が出発点になる。イギリスの植民地統治が完成したのは19世紀中頃とされるが、すでに18世紀にはキリスト教宣教団が英語教育を開始していた。宣教団の英語教育は、当初主にヒンドゥー教徒を対象に実施されたが、その背景に、ヒンドゥー教徒はキリスト教への改宗可能性が高いとの見込みが英側にあった、と指摘されている。この結果、ヒンドゥー知識人の間では英語教育が進み、逆にムスリムはこの面で遅れ、英領植民地統治下でヒンドゥーがムスリムに比べ優位に立つ基盤の一つとなった[SHAH 1992]。その後、東インド会社が英語教育を推進し、受け手のインド側でも有力知識人等が英語教育推進を主張した。さらに、「出版の自由法 (1835)」による英語印刷物出版加速、英語の公用語 (official language) 化が続き、1844年には、全ての政府任官の際に英語の知識を持つ者が優先採用される、との方針が植民地行政官により決定された。これらのため、英語教育は社会的上昇のために不可欠なものとなり[CHAKRABORTY 2003]、19世紀の中頃には英語が高等教育の伝達手段として確立した。

こうした状況に逆行するかのようになり、ムスリムの間ではキリスト教徒への反発とキリスト教宣教への不安などから英語に対する反発も強く、なかなか英語による高等教育は浸透しなかった。東ベンガル (後の東パキスタン、現バングラデシュ) について言えば、1921年にダッカ大学が創設されてようやく英語による大学教育が可能になったとされる[ZAMAN 2003]。この結果、ムスリムの間でも英語で高等教育を受けることが一般的になった。しかし、一度浸透すると英語の影響力は根強く、印パ分離後の東パキスタンでも大学やカレッジでの教育は英語によって行われ続けた。当然、このような状況はベンガル語を「国語」とすべく努力した言語運動にとって好ましいものではない。印パ分離直後の1948年に東パキスタンの国語行動委員会が首相に要求した8項目中の第3項目では「ベンガル語にウルドゥー語と対等の位置」が挙げられたのは先述の通りだが、それに続く第4項目では

注

14 ちなみに、この著者もベンガル語運動を「母語」承認運動であるとしていることに注意したい。先に指摘した「作られた物語」は、かように広く深く浸透している。

「ベンガル語が公的に国語の位置を占めたら、即座に英語廃止」も打ち出されていた[UMAR 1992]。ここに旧宗主国イギリスへの反発、さらには植民地主義の残滓である英語を排除しようとする意思を読み込むことも可能であろう。にもかかわらず、その後の推移はこの要求とは全く逆の方向に動いた。確かに言語運動の結果、ベンガル語はウルドゥー語と並ぶ「国語」と認定された。しかし、その後の1956年憲法では英語が「公用語」であることも確認されたのである[AHMED, K. 1992]。こうしてパキスタン時代を通じて英語は公的な地位を保持し続けた。

3.2. エリートの言語：国語教育徹底の裏側と社会の階層化

言語の問題を考えるには、当然、その前提となる教育の問題を考えないわけにはいかない。植民地宗主国イギリスは教育にも多大な影響を残した。その最大のものとして、英語による教育、及びカリキュラムと教材もイギリス式であることが挙げられる。また、学制や教育モデルも基本的にはイギリス式を踏襲したものであった。このイギリス・モデルによる教育は旧植民地時代からパキスタン時代を通じて維持され続ける。印パ分離後、教育言語について言えば、確かに東パキスタンで初等教育の言語はベンガル語に変更された。しかし、高等教育の言語は英語のままであったし、その他の面でも基本的には植民地時代からの教育方式が維持され続けた。そのため、パキスタン時代からバングラデシュ独立以後も、高等教育を受けたエリートであることは即ち英語ができることを意味したし、逆に英語はエリートの言語であり続けた。

さらに、バングラデシュ独立後も「英語はシステムの本質的な部分として留まっている」[SIDDQUI 2003]とされる。例えば、独立の翌年、1972年にはベンガル語がバングラデシュの「国語」に制定されたが、それにもかかわらず外務省の公式言語は英語のままだったし、軍内部でも同様だった。ベンガル語が教育言語になったものの、大学ではテキストの多くが英語であっただけでなく、学生が試験に答える際、その言語はベンガル語でも英語でも良いとされていた。しかも、これはあくまで公認されている側面での話で、問題は「ベンガル語でも英語でも良い」の「でも」の部分である。実態とは言えば、むしろ教師は英語で受け答えする学生の方を高く評価し、「ベンガル語で答える＝ベンガル語でしか答えられない＝英語が出来ない＝能力が低い」と捉えて厳しい評価を下しがちなのである。

さらに、独立後には私立学校が広まった。その多くは、途中入学枠を設けているものの、基本的には初等教育から中等教育まで一貫性である。すでに1970年代から徐々に増える傾向にあったが、1980年代には本格的な流れとなった。これは公式には、一方で独立後に初等・中等教育が徐々に普及し、人々の間でも教育の必要性が重視されるようになってきたこと、他方では人口の増加による学生数増大に公立学校の新設が追いつかなかったことによる、とされる。しかし、もう一点、隠れた理由がある。英語である。入学試験こそベンガル語でも受けられる機会が増えるようになったとはいえ、高等教育の言語が英語重視であり続けたことから、高等教育への進学を目指す学生やその親たちは英語を学ぶチャンネルを必要とし続けた。その大きな受け皿となったのが私立学校である。進学校として有名な私立学校の多くは授業のかなりの部分を英語で行ったし、地方の私立学校や都市の評価の低い私立学校でさえ公立学校に比べると英語を重視した。このため、私立学校に入学を希望する場合は、事前に“English-medium”（英語を教育言語とする）幼稚園や学習塾（tutorials）に

通う必要が生じ、それらの施設数が急増した。これが受験をめぐる競争を激化させることになり、一部では「入試戦争」と呼ばれる加熱した状況さえ生み出している¹⁵。有名私立学校や学習塾の多くは学生たちにとってイギリスの”O”レベル（中等教育終了試験）や”A”レベル（教育終了一般試験、大体17-18歳で受ける）準備のための英語教育の迂回路となり[ZAMAN 2003]、学生たちは英語に習熟ようになる。この結果、これらの学生にとっては国内の高等教育機関への進学のみならず国外留学が容易になり、社会の上層部では留学が一般的な回路として確立・普及することにもなった。

結局、独立後の「国語」（＝ベンガル語）偏重は、高等教育機関での英語重視や社会の重要部分における英語温存と矛盾するがゆえに、迂回路としての私立学校や学習塾による英語教育を促進することになった。その結果、ベンガル語で教育を受けるだけで終わる一般大衆層と英語に流暢な（最低限、ある程度は英語が出来る）高等教育修了者との差は拡大・固定化する傾向が強まった。他方で、初等教育の拡大が進んだとはいえ、今なお多数の非識字者（＝ベンガル語の読み書きが出来ない人）が存在する。こうして「国語」としてのベンガル語偏重は、意図せざる結果であるとはいえ、①英語でもベンガル語でも読み書きが出来る人々、②ベンガル語でのみ読み書きが出来る人々、③ベンガル語さえ読み書きできない人々、の3層に社会の階層化を進める側面を持ったのである。

3.3. グローバル化の流れの中で：人々の交流と英語

英領植民地としての経験、その後の特に高等教育をめぐる問題から、英語がエリートの言語として確固たる地位を占めてきたことはまぎれもない事実であるが、途上国としての特殊な状況が問題を深刻化させている側面も見逃せない。バングラデシュは「後発途上国」であり、その発展のため様々な開発プロジェクトが実施される「援助の実験場」として名高い。援助関連分野では、それが国際機関によるものであれ政府開発援助（ODA）ないしは非政府系援助（いわゆるNGO）によるものであれ、多くの外国人援助関係者が現場やダッカの事務所でプロジェクトの策定から実施にまで関与することになる。この分野全体としての規模は極めて巨大で、一時期は政府開発予算のほぼ半分を援助関連が占めるほどであった。それゆえ、各種国際機関に始まり各国の開発機関やNGOの事務所がダッカの中心部に多数集中し、さらにはそれらの受け皿となる現地NGOの数は主要なものみでも数百に及んだ。多くの外国人が関与する性格上、それらの事務所では英語の能力が会話のみならず文章作成の面でも不可欠になる。また、仮に職員全員がバングラデシュ人スタッフの地元NGOの場合であっても、活動資金の大部分を外国に頼るため、計画書の作成、資金協力交渉から計画終了後の報告書の作成まで、あらゆる場面で相当程度の英語力は不可欠である。それゆえ、職員になるためには高度の英語力が要請された。しかも、外国人と日常的に接触し豊富な外国資金と関わるがゆえに、それらの職はNGOであっても相当の社会的地位と高給とを保証された「開発エリート」色を強く帯びるようになる¹⁶。こうして独立以後、英語はますます社会的上昇に必須のものとなった。

注

15 一例としてThe Daily Star紙2003年12月10日記事、”Get set go for admission soon: Guardians have started preparing their wards for the annual 'admission war!'”を参照。

16 HOSSAIN [2005:21-22]は、現在のバングラデシュにおける国家的（national）エリートの特徴として、父の世代までに都市専門職化し、高等教育を受けていること、大部分がダッカ出身者・居住者であること等を指摘する。そして、国家的エリートとして具体的には、政治家、高級官僚、軍上層、産業界上層、NGOリーダー、知識人とメディア関係者、宗教・社会的リーダー、学生政治リーダー、等を挙げている[同：23]。ここでは国家的エリートの一部にNGOリーダーが含まれていることに注意したい。なお、これらの人々は、ほぼ全て英語を（少なくとも相当程度）流暢に話せ、読み書きできるとの重要な共通点を有するが、著者はこの点に言及していない。言及するのを忘れるほど、あまりにも当たり前の事実、いわば大前提になっているためであろうか。

これに近年では別の要素が加わった。グローバル化である。先に記したとおり、バングラデシュの教育制度は100年前の英領時代に端を発するイギリス方式を受け継いでおり、時代遅れであった。独立後、ベンガル語偏重の教育政策が採られたため、高等教育では全体的なレベル低下が見られただけでなく、国政レベルの政治的混乱の影響が大学等へも及び、学内で政治がらみの暴力沙汰が多発した。これを嫌った都市中流層以上の世帯では子供を海外留学させる傾向が広まる。特にインドとアメリカへ多くの人に向かい、インドの高等教育機関では1993年時点で推定8万人以上のバングラデシュの学生が学んでいたとされる。当然、教育言語は基本的に全て英語である。

また、1990年代初頭までバングラデシュには国公立の大学・特殊カレッジしかなかった。状況改善のため、1992年に私立大学法が施行され、私立大学が設立されるようになったが、それらの私大は英語で教育を行った。その後、私大の数は急増した。理由として、急激な人口増加、都市化、収入増加があり、その結果、高等教育の需要急増に従来の国公立では対応できなかったことが第一に挙げられる。また、1990年代初頭からの急激な経済自由化とグローバル化が重なり、新都市中間層やニュー・リッチが登場したことも大きな要因であろう。それらの私大はアメリカ型モデルに基づく教育と、英語とコンピューター教育に比重を置いた方式で急激に評価を高めた[QUDDUS 2003, SIDDIQUI 2003]。留学や私大入学には、それ以前からの英語教育と、世界的なモデルに沿った教育が不可欠である。それらを提供したのが1990年代初頭から登場したインターナショナル・スクールであり、多くは1980年代までに出現した学習塾が衣替えしたものであった。さらに1990年代後半には多数の完全なインターナショナル・スクールが設立され、ベンチャー・ビジネスとして経営されたが、それらの多くは外国人が主導するものであった。こうした状況変化を受けて国公立大学も英語教育の改善を検討し、ベンガル語のみの教育方針を見直して、初年次から英語教育を導入するようになったのである[ZAMAN 2003]。

1990年代には、私立大学以外にも英語に関して大きく状況が変化した。多数の英字新聞・雑誌が創刊され、その多くは、金曜日（イスラームの集合礼拝の日であり、バングラデシュの休日）に、「金曜特集号」を付録として組むようになった。これらの付録には多数のエッセイ、小説、評論等が掲載され、人々の英語講読環境は一気に好転した。また、ベンガル語が強調される一方で、学術雑誌や学術出版の重要なものの多くは英語で刊行され続けた。特に自然科学系、法学を中心とする社会科学系でその傾向は著しい。しかも、教育面でベンガル語偏重主義をとるものの、政府出版物の多くは英語である。さらに、バングラデシュ憲法はベンガル語と英語の両方で記されている。

これらと並び重要なのは産業構造の変化であろう。伝統的にバングラデシュでは農水産物が外貨の主要な獲得品目であった。ところが、近年、それが大きく変化した。1990年代以降の縫製産業の国際市場への参入は、バングラデシュの人々に英語が商業スキルとして重要であることを気づかせるきっかけになったのである。現在、縫製産業はバングラデシュの最重要産業であり、外国からの投資受け入れ、並びに輸出目的のため、多様な場面で英語でのやりとりが不可欠になっている。また、言うまでもなく、IT産業の普及も英語の重要性に気づかせる契機となっている。

さらに、移民と出稼ぎの問題がある。English-medium学校での教育が広がるようになったため、余裕がある世帯は高等教育を国外、特に英語圏で受けさせることを視野に入れている。バングラデシュはイギリスの統治下にあったため、伝統的にイギリスへの移民は多かった。ただし、その多く

は植民地時代からの流れを引く船員上がりやその家族が多く、地域的には東北部のシレット出身者が9割以上を占めていた。しかし、近年の外国への留学生急増とバングラデシュ国内での英語に堪能な人々の増加は、これとは異なる分野、具体的にはホワイトカラー層や金融・IT関連分野等への移民増加を生み、その出身地域はダッカを始めとする大都市を中心として全土に及ぶようになってい¹⁷。これらの人々の中ではすでに一定程度の成功を取める例も出ており、それがさらに後続く人を生み出している¹⁸。

こうしたグローバル化と共に生じた人の移動、資本の移動が、様々な局面でバングラデシュの人々を英語へ向かうように促しているのである。英語の重要性が認められて、2001年、ついに英語は公式にバングラデシュの第2言語として認定されるに至った[ZAMAN 2003]。

おわりに

栄光の「エクシェ」をたたえた歌”*Ekusher Gan*”は次のように始まる。

「我が兄弟の血で染まった2月21日を忘れることができようか？

息子を奪われた母の涙、私の血がにじんだ黄金の大地を忘れることができようか？」

この歌は、ある研究論文の注の中で紹介されたものである（GHOSH [1995]、訳は筆者の試訳）。しかし、同じ注においてその論文の著者は、この”*Ekusher Gan*”の作者が現在ロンドン在住であることに言及する。ベンガル語の重要な記念日「エクシェ」、世界母語デーにまでなった「エクシェ」。その栄光をたたえる歌の作者が今ではロンドン在住である皮肉な事実（当然、その日常生活は英語ベースであるだろう）。ここにはまさにバングラデシュの人々にとっての母語、国語、英語を取り巻く複雑な状況が濃縮されて現れているかのようだ。

注

- 17 同国統計局によれば、海外で働く人々（いわゆる出稼ぎだが、多数の移民・移民予備軍を含む）のうち、1996年から2000年の間に、専門職は3,188人から10,669人に3倍以上増加、同じく熟練労働者は64,301人から99,606人に1.5倍増加したのに対し、半熟練労働者（Semi-skilled）は34,689人から26,461人に減少、同じく未熟練労働者は109,536人から85,950人へと大幅に減少している[BBS 2005:163]。まだ絶対数は少ないものの、たった5年間で全体の比重は未熟練労働中心から専門職や熟練労働に比重を移したことが明らかである。専門職は言うに及ばず、熟練労働者の多くも相当程度まで英語が流暢な人々と推測して大過ないだろう。つまり、ここから英語の必要性和有効性は海外での労働でも急激に高まっていることが間接的ながら推測できる。
- 18 バングラデシュの新聞、特に英字新聞には、こうした海外留学、移住を誘う仲介業者や学生獲得を狙う各国の大学の募集広告が連日のように多数掲載されており、その市場規模の大きさを推測させるが、実際に移動している人々がどれほどいるのかを示す具体的な資料は今のところ入手できていない。ただし、統計局の数字によれば、民間の海外からの送金額の約9割を占めるのが労働者からの送金であるが、その額は1998-99会計年度の819.8億タカから、2001-02会計年度の1437.7億タカへと急増している[BBS 2005: 262]。タカ表示であるため、通貨交換レート切り下げの影響があり、その分は割り引いて考えなければならないものの、送金額が増加していることはほぼ間違いない。この点は労働の内容が未熟練労働から専門職や熟練労働に比重を移したことを反映しているだろうし、そこからは、間接的ながら、海外での専門職等が吸引力のある選択肢になっていることをうかがうことができよう。

- AHMED, Kamal Uddin, 1992, "1954 Elections Issues of autonomy", in Sirajul ISLAM ed., *History of Bangladesh 1704-1971* Vol.1 (Political History), Asiatic Society of Bangladesh, Dhaka, pp.462-480.
- AHMED, Rafiq, 2003, "Ekushey February", in Sirajul ISLAM ed., *Banglapedia* Vol.3, Asiatic Society of Bangladesh, Dhaka, pp.464-466.
- ANISUZZAMAN, M., 2000, "The Identity Questions and Politics", in Rounaq JAHAN, ed, *Bangladesh: Promise and performance*, University Press Ltd., Dhaka, pp.45-63.
- Bangladesh Bureau of Statistics (BBS), 2005, *Statistical Pocketbook of Bangladesh 2003*, BBS, Dhaka.
- BHATTACHARYYA, Jnanabrata, 1987, "Language, Class and Community in Bengal", *South Asia Bulletin*, 7-1&2, pp.56-63.
- CHAKRABORTY, Rachana, 2003, "Education: Colonial period", in Sirajul ISLAM ed., *Banglapedia* Vol.3, Asiatic Society of Bangladesh, Dhaka, pp.446-450.
- GHOSH, Shamali, 1995, "Bangladeshi Cultural Symbols and the Bangladesh State", in S. BANDPADHYAY, A. DASGUPTA and W. van SCHENDEL eds., *Bengal: Communities, development and states*, University Press Ltd., Dhaka, pp.195-208.
- HELAL, Bashir Al, 2003a, "Bangla Academy", in Sirajul ISLAM ed., *Banglapedia* Vol.1, Asiatic Society of Bangladesh, Dhaka, pp.429-431.
- , 2003b, "Language Movement", in Sirajul ISLAM ed., *Banglapedia* Vol.6, Asiatic Society of Bangladesh, Dhaka, pp.242-244.
- HOBSBAWM, Eric, and Terence RANGER eds., 1983, *The Invention of Tradition*, Cambridge University Press, Cambridge.
- HOSSAIN, Naomi, 2005, *Elite Perceptions of Poverty in Bangladesh*, University Press Ltd., Dhaka.
- ハック、モンズルール、2003、「ベンガル語の位置と今後」(大橋正明訳)、大橋・村山編著『バングラデシュを知るための60章』明石書店、pp.58-61。
- HUQ, Mohammad Daniul, and Pabitra SARKAR, 2003, "Bangla Language", in Sirajul ISLAM ed., *Banglapedia* Vol.1, Asiatic Society of Bangladesh, Dhaka, pp.431-437.
- ISLAM, Sirajul, 2003, "International Mother Language Day", in Sirajul ISLAM ed., *Banglapedia* Vol.5, Asiatic Society of Bangladesh, Dhaka, p.290.
- KHATUN, Hafiza, 2003, *Dhakaiyas on the Move*, Academic Press and Publishers Ltd., Dhaka.
- QUDDUS, Munir, 2003, "The Political Economy of Higher Education in Bangladesh", in A. ALI, R. KUDDUS and S.S. AND ALEEB eds., *Development Issues of Bangladesh II*, University Press Ltd., Dhaka, pp.349-361.
- RASHID, Harun-or, 1992, "A Move for United Independent Bengal", in Sirajul ISLAM ed., *History of Bangladesh 1704-1971* Vol.1 (Political History), Asiatic Society of Bangladesh, Dhaka, pp.400-419.
- SAMAD, Yunus, 1995, *A Nation in Turmoil: Nationalism and ethnicity in Pakistan, 1937-1958*, Sage Publications India, New Delhi.
- SHAH, Mohammad, 1992, "Bengali Nationalism", in Sirajul ISLAM ed., *History of Bangladesh 1704-1971* Vol.3 (Social and Cultural History), Asiatic Society of Bangladesh, Dhaka, pp.760-804.
- SIDDIQUI, Zillur Rahman, 2003, "Education: Since 1947", in Sirajul ISLAM ed., *Banglapedia* Vol.3, Asiatic Society of Bangladesh, Dhaka, pp.450-456.
- 白井圭、1990、「バングラデシュ・ナショナリズムの源流」、佐藤宏編『バングラデシュ—低開発の社会構造—』アジア経済研究所、東京、pp.41-85。
- SOBHAN, Rehman, 1992, "Economic Basis of Bengali Nationalism", in Sirajul ISLAM ed., *History of Bangladesh 1704-1971* Vol.2 (Economic History), Asiatic Society of Bangladesh, Dhaka, pp.706-780.
- 高田峰夫、2006、『バングラデシュ・ムスリムの民衆意識の変動—デシュとイスラーム—』明石書店。
- 、2008a、「バングラデシュにおける母語・国語・英語—言語運動の栄光とグローバル化の中での矛盾—」東海大学日本語学系編『ことば・ひと・越境』(会議論文集)、東海大学、台中、pp.125-131。
- 、2008b、「チャクマーバングラデシュの知られざる少数民族問題—」、金基淑編『講座世界の先住民族—ファースト・ピブルズの現在—3：南アジア』明石書店、pp.170-190。
- UMAR, Badruddin, 1992, "Language Movement", in Sirajul ISLAM ed., *History of Bangladesh 1704-1971* Vol.1 (Political History), Asiatic Society of Bangladesh, Dhaka, pp.422-461.
- van SCHENDEL, Willem, 2000, "Bengalis, Bangladeshis and Others: Chakma visions of a pluralist Bangladesh", in Rounaq JAHAN, ed, *Bangladesh: Promise and performance*, University Press Ltd., Dhaka, pp.65-105.
- ZAMAN, Niaz, 2003, "English", in Sirajul ISLAM ed., *Banglapedia* Vol.3, Asiatic Society of Bangladesh, Dhaka, pp.480-491.